

## 令和初の第 37 回東京弦月会を終えて

初めて私と夫が同窓会に出席したのは、21 年前、第 16 回東京弦月会でした。その時のゲストは高名なバイオリニストの徳永二男氏で、徳永氏のストラディバリウスの演奏を聴きたいがために 1 歳に満たない娘をつれての参加でした。その時の曲名は忘れてしまいましたが、徳永氏のお人柄を思わせる、親しみやすい優しい音色は今でも覚えています。また、日本のソムリエの草分けである 2 回生の河野昭氏（東京弦月会名誉会長）が講演でワインの魅力的を興味深く語られ、お酒が飲めない私にも、いつか「ワインの勉強をしてみたい」という思いが芽生えるきっかけとなりました。その時配られた、ワインの当たり年の年表カードは手放しがたく、今でも我が家のどこかに眠っています。本当に時が経つのは早いもので、その河野氏から帝国ホテルのベビールームをお世話いただいた時の赤ちゃんは、今年で 22 歳になります。

今回、アトラクションで講演していただいた 11 回生の柴田紘一郎さんのお話には大いに共感させられました。特に共感させられたのは『L (Listen : 聞く) .O (Over view : 全体を見る) .V (Voice : 声) .E (Excuse 許す) 』の‘許し’についてのお話です。柴田さんは『『近くの幼稚園の子供の音がうるさい』という人もいますが、子供はうるさいのが子供です。それを許すのが大人です』ときっぱりおっしゃられました。柴田さんの「LOVE」運動はまさに『心豊かに生きていこう』という私たちへの素晴らしい「メッセージ」であったのではないのでしょうか。皆様にもこの「メッセージ」が届くことを願ってやみません。

御代替わりした、私たち 37 回生が担当した令和初の東京弦月会が無事終了したのは私たちを見守り、我慢強く手取り足取り導いてくださった東京弦月会幹事、役員の皆様方、アトラクションに出演してくださった先輩方、熱心に応援団を指導し応援団に参加してくださった先輩方、関東や大阪在住の同期、宮崎から応援団員として、また制服を着て駆けつけてくれた同期、たくさんの協賛品の提供してくれた宮崎の同期のおかげです。そして長年幹事を務めてくれた同期の日吉君の存在なくしてはやり遂げることはできなかったと思います。37 期幹事、中島さん、高風君、江良君が集まる最初のきっかけをつくってくれたのは日吉君でした。そしてあたたかい拍手と笑顔を惜しげもなく送ってくださったご来場の皆様、そのすべての方に 37 回生を代表してお礼と感謝を申し上げたいと思います。

令和という新しい時代にこの東京弦月会が未長く続きますよう 38 回生、39 回生そしてそののちの代の後輩たちにエールを送りたいと思います。

最後に大先輩の柴田さんにならい、令和の由来として注目を浴びることになった万葉集から 1 首  
秋草に 置く白露の 飽かずのみ 相見るものを 月をし待たむ

(秋草に置く白露のように見飽かぬ思いで逢おう。習いなのだ。また来年の 7 月に会おう) 来年、また、皆様の玉のような笑顔にお会いできるのを楽しみにお待ちしております。

\* 2020 年 8 月 22 日は旧暦の 7 月 4 日

37 回生：三宅 理恵